

「ふじのくに」第37号に収められた川勝平太静岡県知事と、韓国の初代文化大臣、李御寧先生（1934-）の対談は、昨年9月、ソウルの李御寧先生のお宅で行われたものである。川勝知事は、静岡県と姉妹関係にある韓国忠清南道の行事に参加するために、9月10日ソウルに到着、翌日午後遅く忠清南道の道庁所在地である洪城に向かう前の時間を利用して、同日午前、李御寧先生のお宅を訪問して、この対談が実現したものである。

李御寧先生は、『縮み志向の日本人』で日本では知られており、独創的な日本論、日本人論を提出した人として知られている。しかし韓国では傑出した評論家として先生はお若い頃から著名な存在であり、文芸評論家としてまず世に出たのである。しかし文学、文芸にとどまらない社会、文化の評論家としても名声をあげていった。一方、1988年ソウルオリンピックの演出を担当、ついで初代韓国文化部長官（文化大臣）として文化行政にも卓抜な業績を上げていった。近年では、この対談中にも言及されている、「生命資本主義」の提唱、東西比較文明論など、むしろ思想家、李御寧と呼びたいような、世界の未来、東アジアの未来を展望する構想を毎年発言し続けている。

李御寧先生は、日本で出版、講演を行う場合は、自身で日本語原稿を書いておられ、即興的な発言を必要とする対談でも、もちろん日本語でお話しになっている。この対談でも、あの多弁な川勝知事を前にして、自身が主導権をとって自由に論を展開しており、満八十四歳というこの時の年齢を思えば、まことに驚くべき「発言力、発信力」である。

普通は対談というものは司会者がいて適当に調整や話題の転換を図りながら進行するものであるが、また実は私上垣外が司会者ということで参席していたのであるが、冒頭から李御寧先生が旧知の川勝知事に対して自由に語りかけるという形で始まっており、二人の自由な談論というかたちで対談は終わりまで進行したので、司会者の働く余地は全くなかったのである。ただし、司会のコントロールのなかった分、談論風発の趣があり、文学としてみれば興味津々たるものであるが、整理という観点からは、李御寧先生の著作に接したことのない人にしてみれば、いささかわかりにくい、とつつきにくい、という面もなくてはならない。

そこで、用語等、必要最小限の解説的な修正を施して改訂原稿としているが、本当にはこの対談はかなり注釈がないと完全には理解できないのではないかと思う。私は、李御寧先生とは三十年にわたるお付き合いがあり、最初東京でお目にかかったときは、李御寧先生は『縮み志向の日本人』をまだ執筆中の頃であった。（『縮み志向の日本人』、初版出版、1984年、学生社、現在は講談社学術文庫に収録）私は縮み志向の基本は構造主義（プラス記号論）にあると理解しているが、その後李御寧先生は、博士論文を執筆され、それは記号論を中心とするものであったと私は了解している。（記号論研究所の所長もされた。）先生が近年、「生命資本主義」という概念を提唱されたことは、近年の「市民社会」理念からの産業社会、現代資本主義批判、例えばデービット・コーテン『ポスト大企業の世界を創る』に対する李御寧先生独自の批判、反論あるいは新たな提言として理解することができる。ところで、現代の思想家の用いる「市民社会」概念は、私たちが世界史の教科書で知

っている市民社会ではなく、ユルゲン・ハバーマスの「市民的公共性 *bürgerische Öffentlichkeit*」の概念を多かれ少なかれ受けているから、李御寧先生のおっしゃることを理解するにはハバーマスぐらい読んでないと、ということになってくる。

李御寧先生が評論家として韓国で名声を博したのは、記号論であろうと、市民社会論であろうと、もとの思想はそれなりに難解なのであるが、それを読んでなくても、十分に理解できるように、理論を踏まえて市民大衆にわかりやすく語ることのできる、しかも自身の独創的な思想として語ることのできる人として韓国の読者に圧倒的な支持を得たのである。

とはいえ、時間の限られた対談で、李御寧先生は、生命資本主義ばかりでなく、最近のテーマであるAI、人工知能についても語っており、特に李御寧先生の最近の著作を知らない私たちにとっては、かなり難しい部分があるのはやむを得ないであろう。また、日本研究は李御寧先生のお仕事の一部でしかないが、日本文化の歴史的事象について、普通の日本人よりもはるかに知識をお持ちなのはこの対談からもうかがえる。それに加えて韓国文化の様々な話題、中国古典（李御寧先生は、易経をかなり詳しく論じられていた時期があった）など、縦横に引用されて語られる李御寧先生の講演や対談が、面白いけれども完全に理解するのは難しいということにもなってくるのである。

以下、対談の各部分を要約していきたい。

旧王宮の北側にある現在は高級住宅地として知られる平倉洞、向かいに見える山の眺望が素晴らしい李御寧先生のお宅の書斎でこの対談は行われた。家に案内された川勝知事が、李御寧先生の家からの素晴らしい山の景色に感嘆するところから、この訪問は始まった。

冒頭で、川勝知事と李御寧先生が旧知の間柄であることが、語られる。それは、川勝平太が知事になる以前からのことで、つまり川勝氏が学者であった時代からのことであるということ。韓国では、学者仲間は、年齢の上下はあっても、特に海外の人の場合は、「友」である。川勝知事にとっては、旧友ではあっても、李御寧先生のお宅を訪問するのは初めてのことである。

川勝知事が『文化力』と題する著作をあらわしていることにふれて、李御寧先生は、文化は経済にとっても重要なものであると、BTS（防弾少年隊）や「冬のソナタ」をあげながら、文化のもつ力についてまず語る。また自身の作った芸術学校（文化部長官時代に創設した「芸術の殿堂」に附設した芸術学校）が世界的な成功をおさめたこと、つまり韓国の持つ文化力の例を示している。

次に韓国という場所が、大陸の力（ランドパワー）と海洋圏（シーレイン）の中間点で

ある半島という地政学的位置にあることが語られる。この韓国の位置が、東アジア三国（中国、日本、韓国）を結びつけるという意味を持っていることが示される。川勝知事からは、東アジア三国の関係が、グーチョキパーの関係、お互いに勝つ関係と負ける関係を共有していると返される。これは李御寧先生が「ジャンケンポン文明論」として、日本文化の一つの特徴に三者並立、あるいは三すくみの関係を重んずる考え方があることを指摘したことを受けている。

またピエール・ブルディューを引用して、社会資本、産業資本に対して、これからは「生命資源、生命資本」がより重んじられねばならないと李御寧先生は説く。また生命資源で考えると静岡こそが、生命資源豊かな地であるのだ。

川勝知事はこれに答え、富士山の世界遺産をはじめとして、静岡には世界的資産として指定を受けたものが数多くあることを紹介する。

李御寧先生が富士を例にとって、化粧品など産業の世界では、世界一位と言っている、ランキングは常に変動する。富士山は、世界に一つしかない。勝ち負けに関係がない。

これに関わって、江戸時代の朝鮮通信使も、お国自慢で、富士山が優れていると日本人はいうけれども、朝鮮使節は、いや、朝鮮の金剛山も富士にはない独自の美があると、反論した故事が想起される。ここで謙齋の独創的な金剛山図を李御寧先生は紹介して、どうです、もっと高いところから見直すの、その形態のユニークさが理解できる。もっと高いところからながめると、富士山も金剛山も一つの視野に入る。日本も、韓国もこういう高い視点から見てみる必要があるのでは、と問いかける。

日本、韓国、相生（あいおい）、共生を基本とするのでなければならない。（李）

かつて豊臣秀吉の文禄・慶長の役で捕虜として日本に連行された姜沆（カンハン）に、藤原惺窩が儒教を学んだ、日韓友好親善の例である。それが徳川時代の文治主義、平和主義の源流になった（川勝）。

富士山は一つだが、いろいろな視点から見ることに意味がある。富嶽三十六景、いろいろな視点で北斎が描いて傑作が生まれた。（李）

それぞれのものが、オンリーワンであれば、どちらが上だといって争うこともなくなる。誰が中心かと争わず、それぞれが中心である。多中心である。和の精神とは、論語に由来するが、それは多視点主義に基づいている。（川勝）

話題は今最先端の人工知能（AI）に移って、インターネット普及では韓国が日本に先行した。人工知能のAlphaGoがソウルで人間の棋士と対戦したのも、AIの基盤が韓国が一番できているからだ。それでも、AlphaGoのGoは日本語の碁（go）から来ている。日本がアジアの代表で碁も日本から西洋に伝わったから、日本語の碁の呼び方が世界に広まった。その碁の世界一の対戦が、いまやソウルになってきた。アジアの中心も、日本だけではない、中国にも移りうる、韓国にも移りうる。（李）

中国は中国が中心、一番ということで「中華主義」でずっとやってきた。近代には日本

がアジアで一番ということで「大東亜主義」になった。どこかが一番ということでは、東アジア

はうまくいかない。グーとパーの二者だけでは、どちらかが勝ち、相手が負ける形しかない。そこに韓国が加わって、三者並立のグーチョキパー、誰もが負け、誰もが勝つ、形でなければならない。海、陸ということで考えると、ヨーロッパの大陸の力は、陸を通って北朝鮮まで来た。海の力はアメリカから西に日本から韓国まで来た。(李)

文化力、生命力で考えると静岡にはオンリーワンがいろいろある。(李)

静岡と韓国は関りが無いようだが、歴史を見ると白村江の戦いの時は、廬原君臣（いほはらのおおきみ）が韓国までいっている。静岡県歴代の知事でも自分が初めて韓国大使にお目にかかった。韓国と静岡の交流は、私の代からはじまり、発展している。(川勝)

いまこの対談を行っているソウルから見ると、世界が見えてくる。そうした場所が韓半島である。(川勝)

西から陸まわりで来たものには「胡麻」とか胡がつく。洋服とか洋のつくものは、海からやってきた。(川勝、李)

日本人は、中国のものには関心を払う。韓国には、関心がない。防弾少年隊、PSY、現代文化で韓国が世界をリードしているものがあるのに。サムスンが世界一になっても、サムスンから学ぼうとしない。(李)

おんぶ文化は、韓国、日本に共通のものだったが、韓国人が西洋に住んで、そのおんぶ文化に西洋人が注目した。西洋でひろまって、韓国、日本では忘れられた。また、韓国では、子供を孕むと「胎名」をつける。これは世界的に見ても希少なこと。その胎名をつけることが世界に広まろうとしている。静岡にはお茶とかおいしいものがたくさんある。生命資源の豊かなところだ。子供を産むなら静岡に行け。(李)

静岡には世界記憶遺産のある清見寺がある。徳川時代、通信使がここに来て、詩文を楽しんだ。韓国から学んだ徳川の文治主義を象徴する場所だ（文化力）。今日の静岡は、文化力からさらに生命力、生命資本を発展させる社会にならねばならない。私たち二人協力して。(李)

素晴らしいお話に感謝します。(川勝)